

大会 印象記

大友 由紀子

第一日目の懇親会の席で、(昨年に続いて)新入会員の挨拶をさせて頂いた新参者にもかかわらず、大会の印象記を寄せさせて頂けるということ、大変恐縮している。日頃化学的発想に馴れ親んでいる筆者にとって、今大会の「農村社会編成の論理と展開―転換期における家と村落―」という共通課題は、非常に興味深いものであり、大きな期待を胸に、「いいいの村あしがら」へ足を運んだ。大会を終えた今、期待を上回る多岐にわたった研究報告に、新たな「宿題」に目覚めさせられ、とても新鮮な気分浸っている。しかし、正直なところ、自分の経済学知識の貧困に加えて、長時間にわたる緊張感から、時には思考がドロップ・アウトしてしまうというハプニングもあり、まだ頭の中は混沌としたままである。そこで、この頭脳整理の意味から、この印象記を書かせて頂くこうと思う。

今年度の「農村社会編成の論理と展開―転換期における家と村落―」という共通課題は、昨年度まで三年間にわたって議論された、「土地と村落」を受けて提出されたものである。昨年の庄内での大会では、村落のあり方にはそれぞれ相異があるということが明らかにされたわけで、村落のあり方が多様であれば、その構成単位と考えられてきた家の形態もまた多様であろうという前提の上、家と村落の形態と動態の把握、が今回の研究目的として掲げられたのであった。課題報告のトップを切ったのは、柿崎会員の報告であった。同会

員は、「転換期」を、今までの行政指導型の農政が、民間指導型へと転換する時代と解釈し、家を据えるために次の三つの視点を掲げた。それは、①むらでの「信用」とは何か、②家は生活運営体ではないか、③家と家との関係、すなわち相互規定的な家関係から、家というものを捉えるべきではないか、ということであった。分析にあたっては、もはや集落としての限界状況にあると考えられる、過疎山村（長野県飯田市千代法全寺地区）のケースが用いられた。むらの「信用」を取り扱う際、家の信用か個人の信用かという点が不明瞭に思われたが、その「信用」の基礎になるものは、経済力ではなく、近所づきあいにあるという結論は、村をウチ側から見ると、生活運営体としての家の連関としてとらえるということを示すものであった。

次の、後藤（欠席）・光吉・三上・山本・清水五会員の共同研究は、地域の産業・社会構造を異にする、農村と漁村の家（家族）の比較分析から、二地域の家（家族）の構造的差異、および変動のバターン相違を明らかにしようというものであった。当グループは、家族の構造を、家族規範と生活状況との間の緊張関係と捉え、片や地域に進出してきた企業への勤務により兼業化が急速に進む稲作農村（三重県阿山町下友田）、片や沿岸漁業を生活基盤にする漁村（同県鳥羽市神島町）という、生活状況の全く異なる二地域を調査地として選定した。そして、その結果は、家族構成（直系制家族↑↓非直系制家族）、家意識（家の連続性の高低など）、家族の内部構造（夫婦の役割構造など）、親族組織（カブの力大↑↓穏やかな本分家関係）など様々な側面での二地域の家族の相違として示された。この研究は、極めて詳細かつ膨大なデータに基づいて行われており、今回の発表

はほんの一部と思われる。今後、何か他の形で発表されるのであれば、是非とも更に詳しく報告頂きたい研究であった。

二日目の最初の報告は、井上会員の発表であった。井上会員は、家を労働組織と捉え、高度経済成長期以降の、水田地帯における労働力構成の目まぐるしい変動として「転換期」を理解している。使われた資料は、センサスなどの全国的な統計から、山形県・富山県・福井県等での、会員自身の蓄積された事例報告までを含んだもので、ここでは、かなり一般的に当てはめられる事象が導き出されていたと思う。今日の水田地帯の農家就業構造の特徴は、高齢化、兼業化、多就業化として示された。そして、そこでの農業は、約七割はいわゆる「片手間農業」になっていて、稲作労働が、人力・畜力によるものから部分的機械化を経て、全面的機械化に至ることで、労働は軽作業になり、余剰労働力を生み出すようになったと言っている。なお、このような状況は、「中核」農家と言えども決して例外ではないと、会員は指摘している。

最後の大川会員の報告は、山形県下の過疎・出稼ぎ地における家と村落の再編成を、三地区の長年にわたる比較調査から示した研究であった。ここでは特に提言されてはいなかったが、昭和五〇年代後半になると、急激に進んだ過疎・出稼ぎにも緩和の兆しが現れ、村おこし運動によって再編された集落も出てきたという点から、今日を「転換期」と見ていた。そして更に、本研究では、集落の再編を、農家の後継者の確保と跡継ぎの確保という、家の再生産の可能性から捉えていた。

以上のように、課題報告では、家と村落の、多様な形態と動態とが提示され、共同討議へと移された。

共同討議では、①転換期をどう据えるか、②家とは何か、といった二つの点が言及されたが、議論の中では、一番目の「家とは何か」という点のみに、論点が集中し、課題報告に加えて更に様々な視点が提示された。

家意識については、光吉会員や井上会員から、その基礎を家産(家財)と捉える意見が出された。これに対して、大川会員から、過疎地では、土地に生産手段としての価値がなくてもUターンがあるのは、墓があるためではなからうかという異なる意見も出された。

柿崎会員は、家を家関係として見ることを提唱するが、そうであれば家はその地域・地域に適応するアメーバ的存在で、たとえ非農家であっても、日常的な互助組織が恒常的、連続的に行われていて、他の家と関係すれば、家として残るといふことになるという。最後の方で述べられた鳥越会員の発言も、柿崎会員の見解の延長上にあるものと思われるが、一戸前の権利が家の基礎になっているという。共有林の残る集落では、たとえ家財がなくても一戸前としての権利は続き、結局家は変わらないこともあるという。鳥越会員からは更に、新興住宅地の地域自治会でも、一戸前として永続的にそこに住むという前提に立って会合がもたれるところも現れてきており、新興住宅地の世帯も家化しているという極限的な事例も指摘された。

また、家の変動の方向性についても、井上会員から、兼業化が進む中で、農協では、準会員、個人加入にしようという動きがあり、地域農業を支えるのは家から個人に変わる方向のあることが指摘された。すると、副会員から、伝統家族の中にある「家」は、変化しながらも現代家族の中にも存在する、この現代家族における「家」を一つの分析概念として考えていってはどうかという意見が、また、光

吉会員から、家族の上に「家」が被さっており、その「家」がだんだん剥がされてきているのではないかという意見が出された。

このように、「転換期」とは何か、「家」とは何かという共通の認識は出来たわけではなかったが、多様な視点、問題が示されたことで、共通課題の目的は一応果たされ、この問題はもう一度、会員個々の「宿題」としてフィードバックされたのである。

次年度の大会は、飛騨高山の白川郷とのことで、今から大変楽しみにしている。ただ、抜群の環境の中にいながら会場の建物に缶詰で終わらなければいいのだが……。

